



稲荷山姫塚古墳との比較から見えるもの

稲荷山北端 1 号墳

～古墳時代前期の積石塚古墳の調査～

2015年
11月21日

1 古墳の立体感

稲荷山北端1号墳は、丘陵の高い方に南側方丘部を配置します(写真9)。段構造を持つもののそれほど高い段が存在していなかったようです。一方、稲荷山姫塚古墳は、低い場所に前方部を配置し、岩盤から6m以上も石を積み上げています(写真10)。「立体感に乏しい稲荷山北端1号墳」と言えます。



写真9 稲荷山北端1号墳 南側方丘部の様子(南東から)

稲荷山姫塚古墳



写真10 稲荷山姫塚古墳 前方部南側面の様子(南東から)

2 古墳の構造

稲荷山北端1号墳の円丘部北西側では、一部で高さが30cm程度の板石積みが見られますが、同じ列には塊石も利用して段を造ります(写真11)。



写真11 稲荷山北端1号墳 円丘部の段(北から)

一方、稲荷山姫塚古墳は、板石積みを多用した様子が観察できます。稲荷山北端1号墳は、板石積みを施すものの、部分的かつ低く積むのが特徴と言えます。



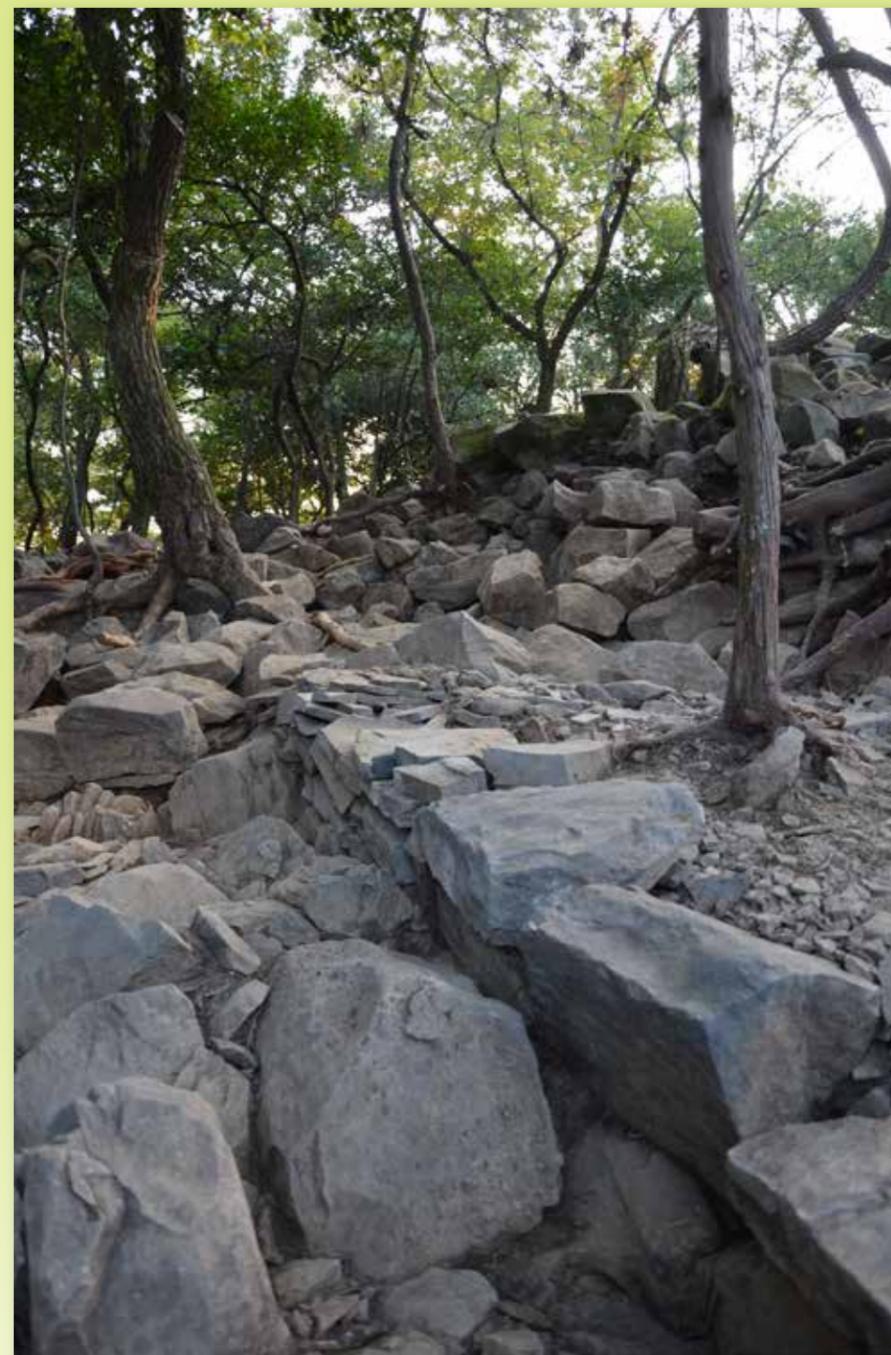
写真12 稲荷山姫塚古墳 後円部の段(北東から)

3 遺物

稲荷山北端1号墳の調査では、土器の小破片が15点程度出土したのに対して、稲荷山姫塚古墳は、200点以上の埴輪片が出土し、その内容は、壺の形をした埴輪片など、円筒埴輪という定まった形の埴輪が出現する前の埴輪でした。また、埴輪の種類が多いことも特徴のひとつと言えます。

稲荷山北端1号墳は、少ない出土資料ですが稲荷山姫塚古墳のような厚さ・形の遺物片は出土していません。現段階では、稲荷山北端1号墳は、埴輪を積極的に用いていない古墳と言えます。

古墳の立体感や段の造りかた、さらに遺物の量と種類を比較すると、稲荷山北端1号墳の方が稲荷山姫塚古墳よりも古い要素を持つ古墳の可能性が考えられます。



稲荷山北端1号墳 1トレンチ 中段(北西から)

稲荷山北端1号墳は、栗林公園の借景にあたる紫雲山、別名稲荷山に造られた積石塚古墳です。昨年度に三次元レーザー測量を実施し、今年度は古墳の形及び規模、構造を明らかにすることを目的として発掘調査を行いました。



古墳の価値 古墳からのメッセージ

今年度の発掘調査によって、古墳の形が双方中円墳(図4)になることが明らかになりましたが、古墳の北端は確認できず、古墳の規模の確定には至りませんでした。このため、次年度も古墳の規模を確定するための発掘調査を予定しています。

調査途上ではありますが、稲荷山北端1号墳の価値を考える場合のポイントを以下にまとめます。

- ①古墳時代前期前半に位置づけられる稲荷山姫塚古墳よりも古い可能性がある。
- ②古墳が造られ始めた頃の古墳である可能性があり、畿内とは異なる双方中円墳という形を採用している。
- ③通常、土で造る古墳を、石という素材のみで造る。

以上の特徴から、稲荷山北端1号墳は讃岐において古墳づくりが始まった頃の、畿内とは異なる独自性を表現した古墳として、高い価値があると考えられます。

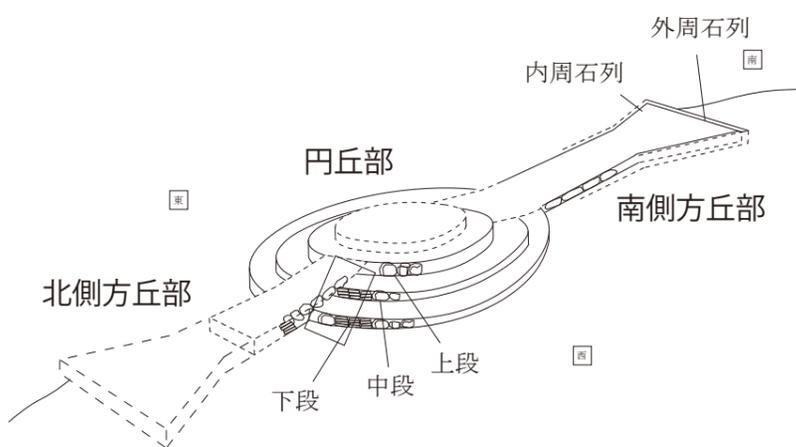


図4 稲荷山北端1号墳 イメージ図



古墳の立地と周辺の古墳 山のどの位置にある古墳かな？



見学の視点 - 観察のポイントは古墳の形! -

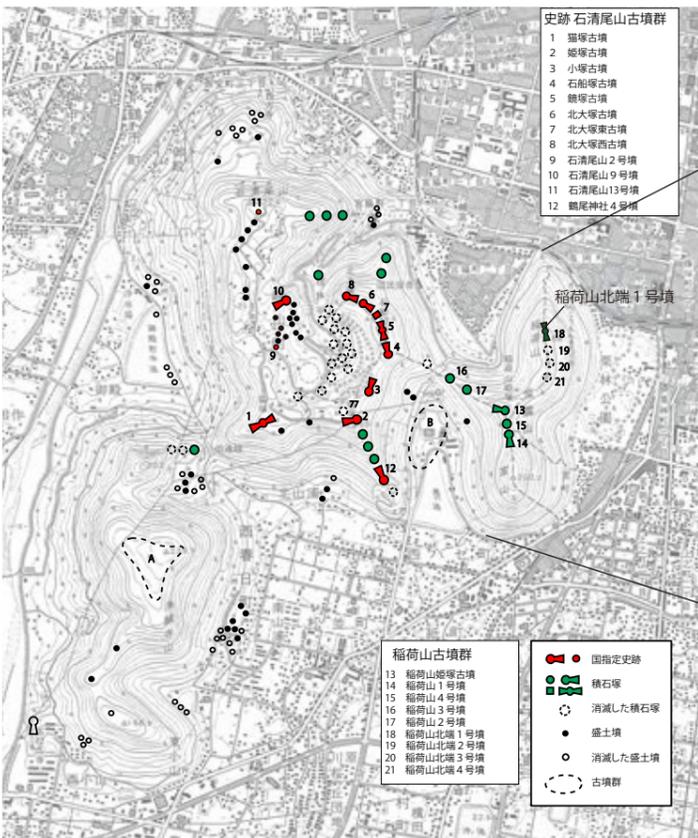


図1 石清尾山 古墳分布図



図2 稲荷山 赤色立体地図

稲荷山北端1号墳がある石清尾山は、西から浄願寺山・峰山・稲荷山からなります(図1)。

稲荷山北端1号墳は、稲荷山山頂の北端に位置する積石塚古墳です。(図2)。古墳の上からは、北側に広がる瀬戸内海を見ることができます。古墳は、尾根筋にほぼ沿って南北方向に主軸をむけて造られています。

稲荷山の上には他にも複数の古墳があり、南方約400mには昨年度まで発掘調査を行っていた積石塚前方後円墳の稲荷山姫塚古墳(全長約54m)、その南側すぐに、今年度測量調査を行った稲荷山1号墳があります(図2)。

図1は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「高松南部」を一部改変して使用

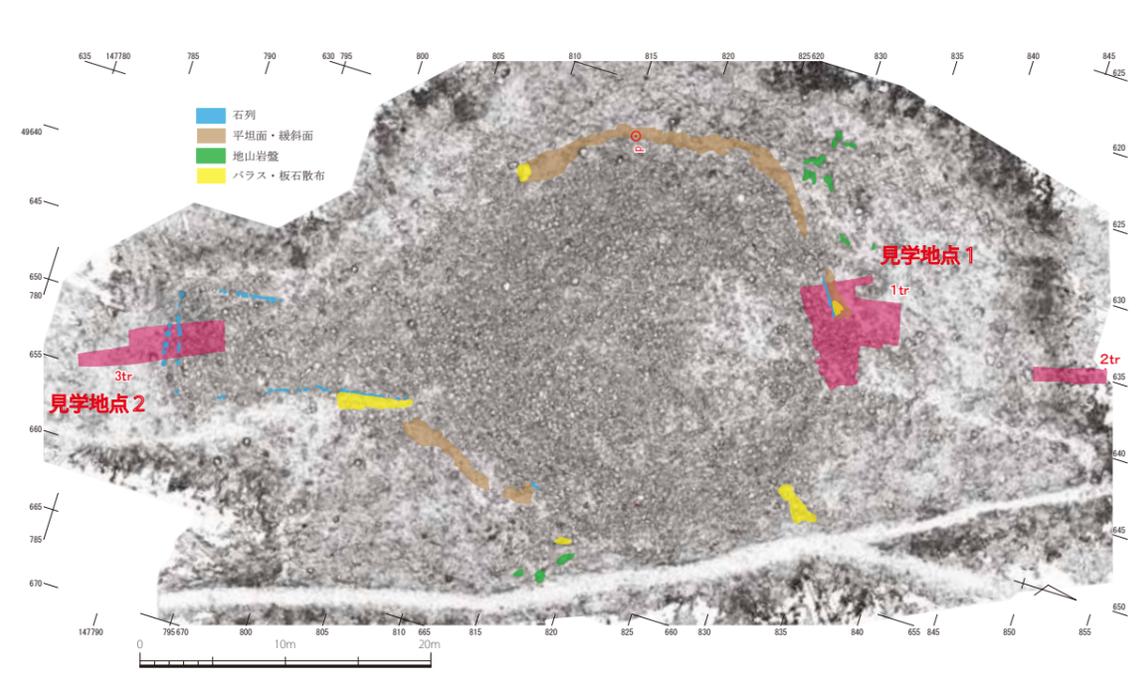


図3 稲荷山北端1号墳 三次元レーザー測量図

昨年度の測量調査で、古墳の丸の部分(以下、円丘部)と、丸の南側に三味線のバチの形に似た四角(以下、南側方丘部)が存在することは判明していました。しかし、円丘部の北側に地形の高まりが存在することから、さらに北側に墳丘が続く可能性も考えられました。そのため、今年度は、円丘部と北側に続く地形の高まりが交わる部分などを調査しました(図3)。

調査の結果、古墳の芯となる石材が円丘部の北側にも連続して存在することを確認しました。

調査状況と峰山にある古墳の形を参考にすると、稲荷山北端1号墳の形は、「双方中円墳」と考えられます。

今年の調査で南側方丘部南端は明らかになりましたが、北側の古墳の端を確定することはできませんでした。そのため、現在分かっていることは、円丘部の直径が28m程度、南側方丘部の長さが20m程度ということです。

それでは、重要な調査成果のあった1・3トレンチを御覧ください。

見学地点1

円丘部の構造 (1トレンチの調査成果)

見学地点2

南側方丘部の構造 (3トレンチの調査成果)



写真1 1トレンチ 上～下段の様子 (北西から)



写真2 1トレンチ 中・下段の背部の様子 (西から)



写真3 1トレンチ 中段の様子 (北西から)



写真4 1トレンチ 円丘部と北側方丘部の合流部 (西から)

1トレンチで合計3列分(下から下段・中段・上段と仮称)の段構造を確認しました。下段は、この山の岩盤の上に直接、塊石と板石を積み上げています(写真1)。下段と中段の間は、拳大から人頭大程度の塊石などが敷き詰められています(写真2)。

中段は、北側方丘部とのつなぎ目付近は板石の垂直壁、それよりも西側は外側に面を持つ塊石を各2石程度積み上げて造ります(写真3)。中段の背部にはバラス状の細かい石材が詰められています(写真4)。中段の下部は、下段背部の詰め石で隠されています。

上段は、明瞭な段構造が残っていませんが、一部墳丘の外側に面を向けた石材が見られます。上段の石材も、前面にある中段背部の詰め石で隠されます。

以上のことから、円丘部は墳丘内側の上段を最初に造ったと考えられます。

3トレンチでは、合計2列分(墳丘内側から内周石列・外周石列と仮称)の石列を確認しました。内周石列は、角柱状の石材や塊石を墳丘の外側に面を向けて並べています(写真5・6)。内周石列の背部には、斜めに突き刺さったような塊石があり、古墳の芯を構成する石材の可能性がります(写真7)。

内周石列から約1.4m外側に、外周石列があります。外周石列を構成するのは、外側に面を持つ人頭大程度の塊石です。おそらく外周石列は岩盤の上に直接置かれていたと考えられます。外周石列の外側では、多数の板石などが出土しました(写真8)。板石を積んだ状態は確認できませんでしたが、外周石列付近で、板石が使用されていた可能性があります。

内周石列の下部が外周石列背部の詰め物によって隠されてしまうことから、内周石列を先に造ったと考えられます。



写真5 3トレンチ 内・外周石列の様子 (南東から)



写真6 3トレンチ 内・外周石列の様子 (東から)



写真7 3トレンチ 内周石列背部の石材の様子(南西から)



写真8 3トレンチ 外周石列前面の板石の様子(南西から)